

台湾台北市における日本語による高齢者デイケア センター「玉蘭荘」¹⁾に関する基礎的研究

張 紋 絹

- 一、はじめに
 - 1. 問題意識
 - 2. 研究手法
 - 3. 論文構成
- 二、玉蘭荘の成立経緯とその後の活動実態
 - 1. 成立経緯
 - 2. 活動実態
- 三、玉蘭荘に集まる人々の思いから見た玉蘭荘の場所性
 - 1. 玉蘭荘に集まる人々の構成とその変化
 - 2. 参加者たちの玉蘭荘に対する思い
 - 3. ボランティアたちの玉蘭荘に対する思い
- 四、結びにかえて
 - 1. 外部の支援や交流団体の玉蘭荘に対する眼差し
 - 2. 運営側の玉蘭荘に対する定義と期待
 - 3. 玉蘭荘の場所的特質をめぐって
 - 4. 今後の課題

キーワード：在台日本婦人、日本語世代の台湾人、日本語、台湾の中の日本

一、はじめに

（1）後述するが、1993年に社団法人化に伴い、「玉蘭荘」の正式名称は「社団法人台北市松年福祉会」となった。しかし、その後も参加者たちは「玉蘭荘」という愛称を使い続けているため、本稿でもそれに倣って「玉蘭荘」と表記する。なお、以下では括弧を省略する。また、「玉蘭荘」の英語名について、ホームページ（<http://www.gyokulansou.org.tw>）で表記された英語名は「Taipei Gyokuransou Day Care Center」であるが、いくつかの刊行物では「Taipei Gyokulan Care Center」と表記している。なお、中国語が併用

あ、ひな人形！日本を離れてまだ二年半というのに、妙に懐かしい空気に触れるところが玉蘭荘です。台湾では赤とんぼがいなくても共に「赤とんぼ」を歌っては郷愁に侵ったり、雪が降らなくても「津軽海峡冬景色」の曲に心をふるわせたりする、うれしいけれども、国としても一人ひとりの人生としても歴史の重みのつまった台湾。その大事なものの、大事な一人ひとりをつめた宝石箱が玉蘭荘²⁾。

1. 問題意識

2009年の11月に、日本のある特別養護老人ホームが発行した便りに掲載された次の一文を読んで驚いた。「台湾台北市にあるクリスチャンの団体が戦前台湾人と結婚した在台日本女性を中心にして、開かれているデイサービス『玉蘭荘（中略）』。玉蘭荘は台湾で唯一日本語で活動する高齢者団体である」³⁾。台湾の台北で生れ育っているながら、筆者はその時まで玉蘭荘のことをまったく知らなかったのである。その

される「玉蘭荘」のパンフレットでは日本語で「日本語による高齢者デイケアセンター」と書かれており、日本語使用という点も本論文の主な論点であるため、本論文の英文題目としては「Taipei Gyokulansou Japanese Day Care Center」に統一して表記する。

（2）玉蘭荘創立二十周年記念文集編集委員会編『玉蘭のかほりー玉蘭荘創立二十周年記念文集 日本語版』社団法人台北市松年福祉会「玉蘭荘」、2009年、41頁。

（3）『園田苑だより』575号、2003年10月2日。



写真①玉蘭荘の一角に飾ってある京人形。筆者撮影。



写真②玉蘭荘の一角に飾ってある日本的な飾り物と日本語の玉蘭荘の
荘歌。筆者撮影。



写真③日本の風物カラーカレンダー。筆者撮影。

後筆者は、2010年の1月に大阪で、1992年から1995年まで三年間玉蘭荘の総幹事を勤めた日本人女性Oさんと会い、玉蘭荘の話を聞く機会を持った。そして彼女の紹介で台湾台北在住の現総幹事の日本人女性と連絡を取ることができ、2010年の2月にはじめて玉蘭荘を訪ねた。

実際に現地を訪ねるまでの筆者の玉蘭荘に対するイメージは、クリスチャン団体が作った日本語を用いる高齢者ケアの場所で、高齢の在日日本婦人と日本語世代の台湾人が通うデイケアセンター、といったものに過ぎなかった。だが、玉蘭荘に入った瞬間、玉蘭荘の空間の強烈な日本色に圧倒された。京人形や羽子板などの飾り物、日本語の本が多く並ぶ本棚、日本語の告知板、桜、富士山、舞妓や相撲などの日本の風物カラーカレンダーなど、日本らしさが視覚的に伝わってきた。(写真①/写真②/写真③) その日は非活動日で、総幹事の日本人女性Iさんとしか会えなかったが、二度目以降の訪問で

会った参加者の方々は、玉蘭荘の「台湾の中の日本」という印象をより一層強めた。挨拶やお茶などの際の日本的な礼儀作法、身体感覚、何かしら漂う日本的な雰囲気などから、日本人か台湾人か判然としない方々。そして、彼(女)たちの口々から飛び交わす日本語、日本語で進行する各プログラムなどは、自分に日本にいるような錯覚をもたらし、この場所の歴史的社会的意味を考えずにはいられなかった。

なぜ台湾にこのような「日本」ができたのか、どのような経緯によって玉蘭荘は台湾で設立されたのか？そうした「日本的な」雰囲気はどのようにして築かれたのか、人々は何故に玉蘭荘

に来るのか、彼（女）たちにとって玉蘭荘はどのような場所なのか、つまり、どのような意味を持つ場所なのか。筆者は以上の一連の問題意識を出発点とし、玉蘭荘という場所と玉蘭荘に集まる人々を対象に調査研究を行ってきた。本論文はその中間報告である。

2. 研究方法

先行研究としては『玉蘭荘の金曜日ー台湾に生きる日本人妻たちの戦後 50 年』という一冊のノンフィクションしかない。そのうえ、ここでは主に日本人妻を検討対象としているため、玉蘭荘の成立経緯とその後の活動実態が詳細に記述されておらず、玉蘭荘に集まる日本人妻以外の人々のこともほとんど詳細に検討されていない。そこで、本研究では、それらのことを明らかにするために、参与観察と玉蘭荘に集まる人々に対するインタビュー調査を重視する。

さて、筆者は 2010 年 2 月 11 日～3 月 7 日、6 月 23 日～7 月 8 日、10 月 15 日～10 月 30 日、2011 年 1 月 22 日～29 日といったように断続的に玉蘭荘の活動日にボランティアとして参加しながら参与観察を実施した。そして参与観察の際に感じた問題点や話しかけられたことなどを踏まえたうえで、インタビュー調査を実施した。と同時に、玉蘭荘の出版物などの関連資料を収集した。

調査の時の使用言語は基本的に日本語であったが、場合によっては河洛語⁴⁾と中国語も併用した。玉蘭荘での共通言語は日本語だが、そこに集まる人々のバックグラウンドは多様であるため、その時に自然に使われた言葉に対応して

記録することを原則とした⁵⁾。

また、インタビュー調査の実施形態について、ほとんどのインタビュー調査は玉蘭荘で筆記によって実施したものである。なお、そのなかの一人だけはその後日に改めて自宅を訪問して録音しながらさらに詳細なインタビューを行った。その他数人に対しても、メールか手紙で補足調査を行った。調査時間は主に朝のプログラムの始まる前、昼の休み時間、午後のプログラムの終了後などで、場合によっては対象者の希望あるいは彼（女）たちの了承を得た上でプログラムの進行する時間帯に別室で行ったこともある。インタビューは一人あたり平均 30 分～2 時間程度で、自宅で実施した対象者とは 5 時間ぐらいに及んだ。なお、なかには間隔を空けて数回にわたってインタビューを行った対象者も少なくない。

対象者の選定について、まず歴代の総幹事の中で特に玉蘭荘のあり方に重要な影響を与えた 3 人にインタビューを行った。次に、参加者の中でも、特に高齢の方や玉蘭荘経験年数の長い方、そして、なるべく多様な歴史経験を持つ方々⁶⁾を対象とした。玉蘭荘運営の中心メンバー数人に対してもインタビューを行った。それに加えて、可能な限り多くの人々と話すことに努めた。彼（女）たちとの雑談に近い談話から得られた情報も本論文に多く活用している。

なお、対象者たちのプライバシーに配慮して、本論文ではすべての人物名をアルファベットで表記する。バックグラウンドについても、語りを引用する上で必要と判断する場合に限って格別に注意を払って言及することとする。

(4) 河洛語は台湾の漢民族の大部分を占める河洛人の話す言語。河洛人が中国大陆の福建南部からの移民であるので閩南語とも言う。また、河洛人は台湾で最多の人口を誇るエスニックグループなので河洛語も台湾では一般的に台湾語と称されている。しかし、そういう称呼に対して、台湾のほかのエスニックグループの言語を無視しているといった批判があるため、本論文

では引用の箇所に限って台湾語と表記するが、それ以外は河洛語と表記する。

(5) ただし、本論文で提示する口述資料は特に断り書きのない場合、すべて日本語による口述資料である。

(6) ボランティアとして玉蘭荘に集まる方々と接触してきたため、インタビューする前にすでに多くの方々のバックグラウンドを知っていたのである。

3. 論文構成

本論文の構成について簡単に示しておこう。まず次章では、参与観察の知見とインタビュー調査で得られた口述資料を玉蘭荘の会誌や出版物などと併せて、玉蘭荘の成立経緯と活動の実態を明らかにする。次に第三章では、玉蘭荘に集まる人々に注目し、特に参加者たちとボランティアたちの人員構成とその変化を概観する。そして、彼（女）たちの玉蘭荘に対する様々な思いを取り上げて、彼（女）たちは何故に玉蘭荘に来るのか、彼（女）たちにとっての玉蘭荘はどのような場所なのか、彼（女）たちは玉蘭荘に何を求めようとしているのかなどを分析する。終章では、玉蘭荘と交流・支援関係のある外部の団体の玉蘭荘に対する眼差しを加え、さらには運営する側の玉蘭荘に対する定義や期待も視野に入れて、玉蘭荘の場所的特質を検討したい。

二、玉蘭荘の成立経緯とその後の活動実態

1. 成立経緯

玉蘭荘の設立母体は日本語キリスト教集会の「聖書と祈りの会」⁷⁾である。聖書と祈りの会は以下のような趣旨のもとに、1978年10月に日本人牧師加藤実が始めた高齢の在日日本婦人と日本語世代の台湾人のための聖書研究会である。

過酷だった太平洋戦争、そして敗戦、日本歴史の動乱に巻き込まれて戦後多くの日本女性が台湾の人と結婚して渡台した。又中国大陆からも共産党に追われて多くの日本女性が台湾の夫、或いは中国の夫について渡って来た。これら日本女性は言語、風俗、習慣の違いに非常な苦勞の人生を送り、今

すでに老境に達している。又かつて日清戦争に勝利した日本が、台湾を植民地として支配し、明治、大正、昭和三代にわたって徹底した皇民化教育を実施した結果、日常会話は台湾語でも、読む、書く、歌うことは日本語によらねば感動が得られないという台湾の人達が多く、この方達も等しく老境にある。このような現実を直視する時、真の救いであるキリストをのべ伝える事は日本人としては人道上の責任をとることであり、ましてキリスト者としては絶対に果すべき使命であると考えるのである。⁸⁾

当時は月に二回、第一、第三金曜日に無料で借用した台北 YMCA 二階の一室で集会を開いた。初期には牧師、信徒4名、求道者7名、計12名であったが、回を重ねるごとに人数が増え、一周年記念集会には97名もの出席者がいた。諸都合によって、1980年6月からは台北の台湾基督長老教会東門教会に場所を移し、台湾基督長老教会の活動の一部となった。集会時間もその後は毎週木曜日に変更して現在まで活動を続けてきた。

10年目の1988年に、当時の堀田久子宣教師は在日日本婦人の晩年の悲哀、「例えば、身体が衰え、臥せった病床で、十分にことばで苦しさを訴えることができない、だからわかってもらえない悲しさがある、脂っこい台湾の食事を食べることができない、でも梅干一つ身の回りにはない」⁹⁾というような境遇に強い関心を持ち、そうした婦人たちを訪問し続け、その際にできる限り日本的なものを持参し慰めた。また、会員の高齢化問題にも直面していたこともあって、高齢の在日日本婦人と日本語世代の台湾人に対する積極的なケアの必要性を痛感し、日本語の高齢者ケアセンターの建設を呼びかけた。

(7) 以下括弧を略す。

(8) 『聖書と祈りの会だより 玉蘭』第1号、1988年4

月7日。

(9) 元総幹事(1992～1995年)のOさんによる。

それにこたえ、1989年の夏に聖書と祈りの会
は高齢者のケアセンターについて協議し、台湾
基督長老教会永吉教会の長老で日本語世代の台
湾人鄭張淑梅を専任者として選定した。そして、
日本の教会の協力を得て、彼女を日本に送って
様々な高齢者ケアセンターや団体の見学研修を
させた。と同時に、趣意書を公表し、アピール
と募金協力の呼びかけをした。同年の9月に、
日本語の高齢者デイケアセンター玉蘭荘は無料
で借用した台湾基督長老教会安和教会の地下室
でスタートした。

活動日は毎週月、金曜日で、午前10時から
午後3時までを活動時間とした。当初の活動内
容について、朝からは礼拝、聖書の話、賛美歌、
懐かしい童謡と思いの歌などを歌い、軽い体
操やその他の運動、趣味活動、講演会、そして
昼食、休憩、午後は手工芸、絵画、書法、交わ
り、ビデオや映画の鑑賞会、料理講習会など様
々なプログラムが組まれていた。そのうちに休憩
やお茶の時間などもスケジュールに組まれて、
すべてのプログラムへの参加を強制することな
く、様々なプログラムがゆるやかな雰囲気が進
められていた⁽¹⁰⁾。初期の参加者の大半は聖書
と祈りの会の会員あるいは台湾基督長老教会の
教友や彼(女)たちの友人で、平均年齢は60
代から70代前後であった。20人前後の少人数
から、その後は年々増えて1990年代中期に入
ると参加人数は50名を越えた。また、創設初
期には日本人と台湾人は半々ぐらいだったが、

台湾人参加者が年々増えて、1990年代中期頃
には日本人参加者の割合が15%～20%前後と
なった。そのほとんどが女性で、男性は5%ぐ
らいであった。

創設初期の運営方針としては、参加者は一日
100元と食費実費を各自負担し、その他の人件
費、設備費、維持費は募金によってまかなうこ
とにしていた。ところが、創設して一年半が経っ
た頃には既に財政上の困難に陥ったため、やむ
を得ず玉蘭荘は聖書と祈りの会から独立⁽¹¹⁾し
た。ボランティアのみで活動を継続させていく
方針となり、堀田久子宣教師が事務員兼世話係
兼説教者となった。当時、安和教会のボラン
ティア、聖書と祈りの会の参加者、そして鯉
教会の日本語バイブルクラスの婦人たちが親身
に支援した。そのほとんどが堀田久子宣教師の
理念に賛同し、「堀田先生をたすける、たすけ
たいという気持ちによって関わっていた」とい
う⁽¹²⁾。1992年に、堀田久子宣教師は任期終了
で帰国せざるを得なくなったため、信仰深く献
身的なキリスト教信者の日本人保健師Oさん
が後任の世話人を志願した。彼女の台湾滞在ビ
ザの取得は難航だったが、日本キリスト教海外
医療協力会(JOCS)の協力を得て彼女を台湾
地区担当ワーカーとして派遣し、一方、台湾サ
イドでは台湾基督長老教会が日本との宣教協約
に基づいてインビテーションを出したので、彼
女はようやくビザを取得できて、1992年に玉
蘭荘の総幹事に就任した⁽¹³⁾。彼女が1995年に

(10) 『聖書と祈りの会だより 玉蘭』第6号、1989年9月10日。

(11) 運営の中心人物のBさんによると、「過去においてはどちらも掛け持ちの会員があったり、あちら(筆者注:聖書と祈りの会)の専任牧師が玉蘭荘に出向いてこられた時期もありました。現在は、特に関係はありません」。

(12) 同注9。

(13) 日本キリスト教海外医療協力会(JOCS)は、日本のキリスト教医療従事者の集い「日本キリスト教医科連盟(JCMA)」のメンバーを中心に、主にアジア

の保健医療の向上を目指して設立され、現在はキリスト者のみでなく、広く日本の善意のある人々の協力のもとに活動を続けている。ビザ取得にJOCSの協力を得ただけでなく、Oさんの1992年から1995年までの三年間の任期の生活費や旅費などの諸費用もすべてJOCSの支援によるのであった。また、その後もJOCSの支援によって、玉蘭荘の運営に関わる数人のボランティアを日本の高齢者福祉の見学研修に派遣する事ができた。(玉蘭荘創立二十周年記念文集編集委員会編、前掲書、7頁;玉蘭荘創立十五周年記念文集編集委員会編『玉蘭のかほりー玉蘭荘創立十五周年記』

任期終了後、参加者兼ボランティアで日本語世代の台湾人男性のCさんが総幹事職を引き受けた。彼の後は日本語のできる台湾人看護婦、台湾人と国際結婚して台湾在住の日本人保健師、日本語のできない台湾人看護婦が次々と総幹事の職を引き続いた。現在はその台湾在住の日本人保健師Iさんが再び総幹事職を担当している。また、主に事務的な仕事を担当するもう一人の有給の専任幹事がいて、現在は日本語が片言で河洛語が堪能な台湾人女性が任用されている。そのほか、数多くのボランティアの理監事や運営委員などが運営に協力している。

活動場所に関しては、玉蘭荘は諸都合によって1989年創設後の四年間に活動場所を三ヶ所も転々とした。活動を安定的に継続させるため、そして参加者の増加に伴ってより広い場所が必要となってきたから、それに伴って家賃負担も重くなることを予見したため、1992年に当時の指導者である堀田久子宣教師が理事会組織を立ち上げて活動場所購入のための募金活動を始めた。当時からの熱心の参加者Jさんによると、「その時みんなは玉蘭荘を続けさせたいから、玉蘭荘を失いたくないから、毎月自動的に定額献金をして、何年間もがんばりました」。こうして、参加者たちの定額献金や自由献金をはじめ、日本のクリスチャン団体とその他の日台諸団体の寄附によって、玉蘭荘はようやく活動場所を購入して確保できた。購入したのは台北市内で立地の良い十二階建てビルの四階で、総面積が51坪で部屋がいくつもあって、日当たりも良く、交通が便利でエレベータもあるので、高齢者向けの活動をする玉蘭荘にふさわしいのである¹⁴⁾。

また、玉蘭荘の運営資金に関しては、前でも

触れたように、参加者は一日100元と食費実費を負担するのみで、その他の人件費、設備費、維持費は募金によってまかなっている。創設初期から、参加者たちの献金をはじめ、台湾基督長老教会の諸教会やJOCSなどから支援を受けてきたが、財団法人交流協会、日本工商会、台湾日本人会、台北東海ロータリー、その他の日台の様々な団体も初期から継続的な賛助協力をしている。しかし、より安定した運営を望んで、玉蘭荘は創設初期から社団法人化を計った。そして、1993年12月によりやうく台北市社会局から社団法人の設立を許可された。それ以来、通常はこれまで通りに「玉蘭荘」と呼んでいるが、公文書などでは台北市社会局の指導によって理事会が決定した「社団法人台北市松年福祉会」の名称を使用することになった¹⁵⁾。社団法人となってから、参加者とは別組織で、玉蘭荘の活動に賛同して側面から支援し協力する会員を募ることもできるようになった。関連法律に基づいて、会員資格は台北市に住む20才以上の人で、入会費500元と年会費1000元を収めると会員になることができる。また、企業からの献金なども税金控除の適用を受けることができるなど、社会的にも運営しやすい道が開かれたという¹⁶⁾。

以上、玉蘭荘の成立経緯、初期の活動と人員構成、そして組織と運営の概要を述べてきた。次節においては主に参与観察とインタビュー調査の結果に基づいて、現在の玉蘭荘の活動実態を描く。

2. 活動実態

玉蘭荘の活動は一般活動、特別活動、個別ケアに分けられる。一般活動日は創設当初と同じ

念文集 一九八九―二〇〇四 日本語版」社団法人台北市松年福祉会「玉蘭荘」、2004年、22頁。）

(14)『玉蘭荘だより』第1号、1992年8月10日；『玉蘭荘だより』第46号、1996年10月25日。

(15)『玉蘭荘だより』第17号、1994年1月20日。

(16) 現在の年会費は1500元である。また、活動参加費は会員が一日100元、非会員が一日150元である。その他、昼食は、必要な人に弁当の実費を徴収し、果物とスープは50元を徴収する。



写真④：玉蘭荘の主な教室。筆者撮影。

く、毎週月、金曜日である。特別活動は不定期で、訪問ケアは基本的には毎週水曜日に行われている。

まず一般活動日の参加者たちの一日をみてみよう。

朝9時頃から、参加者たちは各自で台北市内あるいは台北近郊の家から来荘する。現在の参加者の平均年齢は80歳を越えているため、杖をついてきている人が多く、外国人ヘルパー¹⁷⁾に付き添われながらの人も何人かいる。にもかかわらず、ほとんどの人は80代に見えないぐらい元気な姿で現れる。清潔で少しフォーマルな服装と生き生きした表情から、なにかしら「ケア」を受けに来るというより、「学生」のような雰囲気が漂っている。そして、入った瞬間に「おはようございます」と朗らかな声であいさつし、入り口に掛かっている自分の名札を取り、受付に行ってその日の活動参加費を支払う。昼に弁当が必要な人は実費を納めて注文し、ボランティアたちが用意するスープと果物がほしい人は料金50円を支払う。その後、ボランティアたちが受付に用意してくれているお茶かお湯を手取るか、マイボトルにお茶やお湯を入れてから、教室の中の自分の席へ向かう(写真④)。

活動の開始時間は9時50分で、それまでに参加者同士、あるいはボランティアたちと雑談したり、自分の席で聖書、歌集、またはほかの本を読んだりして待つ。そして活動が開始されると、その日担当のボランティアのピアノの先生と総幹事のIさんは教室に入り、毎朝定例の「歌声高く」というプログラムで一日の活動を始める。「歌声高く」の時間は30分で、参加者たちがリクエストした『玉蘭荘こころの歌』という

歌集に収録している童謡、思い出の歌や賛美歌などを全員で歌う時間である。高齢を感じさせない元気な歌声と楽しそうな笑顔から、心から楽しんでいることが伝わってくる。続いては40分間の「礼拝」の時間で、毎回の担当する牧師は異なるが、参加者たちとともに聖書を読みながら人生に関する説教をする。その後、10分間の休憩時間を挟んで、11時10分から12時までは、毎回異なるプログラムが考案されている。講演会、健康講座、体操などの軽い運動、映像鑑賞、勉強会などである。

12時から午後1時10分までは昼の休憩時間で、参加者たちは受付へ注文した弁当を取りに行ったり、持参した昼食を厨房で温めたりしてから、教室で昼食をとる。昼食後は各自で机を片付けて弁当箱を厨房へ持って行って、捨てたり食器を自分で洗ったりする。そして午後の活動時間がはじまるまでには、教室内でお茶を飲みながら参加者同士あるいはボランティアたちと雑談したり本を読んだりする。また、現在の総幹事Iさんは保健師の資格を持っているので、この時間を利用し、Iさんに健康相談¹⁸⁾をしたり血圧と血糖を計ってもらったりする参加者も時にはいる。

(17) 台湾では1992年から外国人労働者の導入政策が正式的に始まった。外国人のヘルパーの雇用もそれ以来

合法となった。

(18) 健康相談には随時応じている。



写真⑤：プログラム進行用のもう一つの場所

午後のプログラムは午後1時10分から3時までで、習字、手芸、デッサン、映画鑑賞、カラオケ、外来語や英語などの講義、おしゃべり会など、毎回異なるプログラムが設定されている。時には二つの場所に分けて（写真⑤）同時に二つのプログラムを進行させることもあり、参加者たちは自分の趣味に合うプログラムに参加できる。そして3時頃にすべてのプログラムが終わる。各自、お茶かお湯のコップを受付か厨房に返して、参加者同士、あるいはボランティアたちと少々雑談をしたりしてから、自分の名札を入り口の置き場所に返し、「ありがとうございました」といった別れの挨拶をして玉蘭荘を後にする。

なお、全活動日と各プログラムへの参加は強制的ではない。自分の体力と趣味に合わせて、参加する日と時間、そしてプログラムを選択することができる。そのため、遅れてきたり、朝だけあるいは午後だけ、さらには早退する参加者などもある。また、プログラムの進行中に教室から出て別室のソファで休憩する人も時にはいる。

一方、ボランティアたちは一般活動日をどのように過ごすのかをみてみよう。

朝9時前から、ボランティアたちは「おはようございます」と挨拶しながら次々として入ってくる。お湯を沸かしてお茶を用意し、教室の机を拭き、聖書や歌集などの本を机の上に並べるなどをし、その日の活動の準備をする。受付担当のボランティアは受付に座り、来荘する参加者たちを笑顔で迎え、当日の活動参加費を徴収し、そして昼にお弁当が必要かどうか、スープと果物が必要かどうかを確認して料金を徴収する。ほか

のボランティアも笑顔で「おはようございます」などの挨拶の言葉を交わし、参加者たちにお茶やお湯が行き渡っているかどうか、参加者たちに困っていることがないのか、体調がどうかなど、身の回りのことを聞いたり話を聴いたりする。

活動が始まると、各プログラムの進行中に参加者たちに不都合が起きていないか、困っている人はいないかなど、気配りしながら見守って対処するのが午前のボランティアの大切な仕事である。10時頃になると、昼のスープと果物を担当するボランティアが駆けつけてくる。その日の参加者人数とボランティア人数¹⁹⁾を確認してからスープの調理と果物の用意を始める。スープはほとんど日本人ボランティアが担当する。栄養のバランス、食べやすさ、塩加減などに配慮しながら、参加者たちのためにできるだけ日本的な材料で日本風のスープを作る。一方、果物担当のボランティアも栄養のバランスと食べやすさに配慮しながら2種類か3種類の果物を彩りよい用意する。受付担当のボランティアは弁当の数を把握してから、厳選した業者に注文して取り寄せる。そして、午前中のプログラムが終わる少し前に、ほぼボランティア

(19) ボランティアにはスープと果物を無料で提供して

いる。



写真⑥ スープを用意している風景。筆者撮影。



写真⑦ 果物を用意している風景。筆者撮影。

全員でスープと果物を配る準備をしておき、(写真⑥／写真⑦) 午前中のプログラムが終わるとすぐに教室に入り、スープと果物を配る。と同時に弁当の注文をしなかった参加者たちには昼食があるかどうか、気配りながら参加者たちと少しことばを交わす。

参加者たちが昼食を食べ始めると、ボラン

ティアたちも厨房で生ごみの分類と弁当箱の回収などの準備をしてから、別室²⁰⁾でテーブルを囲み、雑談をしながら各自が持参した昼食をその日のスープと果物と一緒に食べる。その間に昼食を済ませた参加者たちは次々と厨房へ行って弁当箱を片付けたり自分が持ってきた食器を洗ったりするが、時々ボランティアたちも食器洗いなどを手伝う。その時に、参加者たちは必ず「ありがとうございます」と礼の言葉をかける。午後のプログラムまでに少し時間が残るため、その間にボランティアたちは昼食の後片付けをしたり、参加者たちのお茶やお湯がまだあるかどうか、体調や気分などに気配りしながら参加者たちと雑談をしたりする。

午後のプログラムが始まると、午前中のようにスープや果物などを準備する必要がないからボランティアたちもややリラックスし、プログラ

ムの進行状況と参加者たちの様子を見守りながら、椅子にかけて本棚の本を読んだり、後述するバザーなどの一般活動以外の活動の準備をしたり、ボランティア同士で雑談をしたりする²¹⁾。およそ2時頃に、参加者たちのためにコーヒーを入れたりお菓子を準備し、プログラムの進行状況に合わせてそれらを配る。

午後3時頃に一日の活動が終わると、ボランティアたちは笑顔とあいさつで参加者たちを見送ってから、

すばやくコップを片付けて荘内全域を掃除する。その後、少し雑談をしてから、3時半か4時前頃に帰路につく。なお、専任の総幹事と幹事には5時まで事務的な仕事が残している。

ここで玉蘭荘での使用言語について特に説明しておきたい。「オープン当初の言語は中国(北京)語、台湾語、日本語の交錯する会であった。

ランティアもいる。

(20) 写真⑤の場所。

(21) 時には習字や手芸などのプログラムに参加するボ

聞く者と話す者が通訳を通して交流していたが、間延びした感じとなっていた。結局共通語である日本語が中心的に使用される頻度が高くなり、北京語、台湾語を話す人たちは各々の活動の場を求めて他の活動に移っていった」²²⁾という。また、元総幹事のOさんによると、「休み時間などはもちろん台湾語が普通に交わされていました。しかし日本語が堪能な世代の人達が多かったので、終始日本語、という感じ」で、プログラムの進行もほとんど日本語で、台湾語講師は非常に少なかった。日本語のできない牧師または講師が来る場合、日本語教育を受けた台湾人が通訳をしながら各プログラムを進めていた。ところで、1993年に、玉蘭荘は一年間近く通常の活動日と異なる日に台湾語による活動を行った。当時、台湾語による活動が必要だという声が上がリ、理事会はそれを承認して実行させたが、運営のしかたや工夫などが万全でなかったこともあって参加者が少なかったため、数ヶ月間で中止となった。現在、玉蘭荘は設立当初の「日本語による高齢者をケアする」という理念に基づいて日本語を公式用語としている。

玉蘭荘で筆者の耳に入った言葉のほとんども日本語である。日本婦人の間では勿論日本語で会話しているが、河洛語の分かる日本婦人と日本語世代の台湾人の間でもほとんどは日本語で会話している。また、台湾人の間では時々河洛語で会話することもあるが²³⁾、ほとんどは日本語で会話している。なお、現在、時々日本語ができないまたは日本語が堪能ではない牧師やプログラムの講師が来るので、日本語の通訳なしで河洛語、または河洛語と日本語を混ぜな

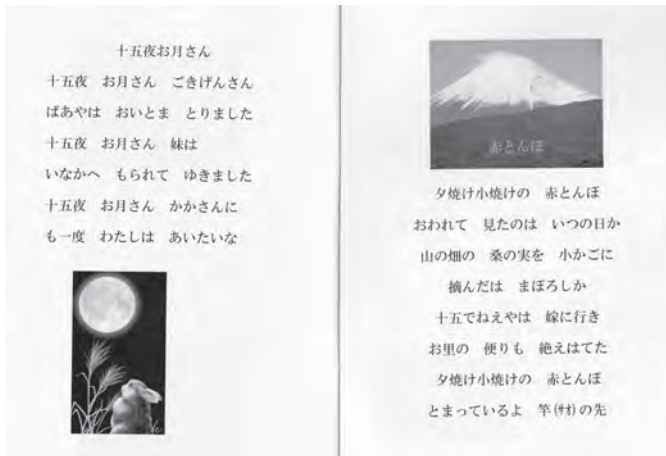
がらプログラムを進行する場合も時にはある。他方、参加者たちとボランティアたちとの間では、日本人または日本語の堪能な台湾人がほとんどなので、台湾人間では河洛語や中国語などの共通言語で会話することもあるが、ほとんどは日本語で会話している。一方、ボランティアたちの中で、中国語や河洛語ができないあるいは堪能ではない日本人ボランティアが少なくないので、ボランティアたちの間ではほとんど日本語で会話している。なお、台湾人間では河洛語や中国語などで会話することもちろんあって、中国語や河洛語などを練習したがっている日本人と台湾人ボランティアの間では中国語や河洛語などで会話をすることもある。要するに、最も一般的に使われる言葉は日本語で、次は河洛語、時には中国語である。それは意識的な使い分けというより、玉蘭荘に集まっている人々が様々な場合によって様々なバックグラウンドの人に対して自然に言葉を使い分けしているのである。

以上の一般活動のほかに、誕生日祝い会、敬老の日、母の日、父の日、端午の節句、ひな祭り、七夕祭りなど台湾と日本の年中行事、創立記念会、クリスマス会、春と秋の近郊へのピクニックなどの特別活動がある。そして、年末に慣例のバザーがある。参加者たちとボランティアたちの手作り品の展示を兼ねた即売会で、家庭的な日本料理も販売され、運営資金を募集する機会であり、外部の支援者たちとの交流の場でもある。また、台湾国内、そして特に日本や日本語と関係のある国内外の団体との各種の交流会がしばしば開催される。玉蘭荘と歴史的・人的つながりのある教会、日本語で活動してい

(22) 張明德編『玉蘭の花びら』社会法人台北市松年福祉会（玉蘭荘）、1995年、4頁。

(23) 「台湾人」は漢民族系と原住民族系に分けられる。漢民族のなかには前述した河洛人のほかに、客家人と終戦後中国大陸から来た「外省人」がいる。一方、原住民族のなかには、政府に公式に認定された14族の

「原住民族」と漢民族化が進んでいる10族の「平埔族」がいる。玉蘭荘に来る「台湾人」はほとんど河洛人で、客家人も非常に少ないが、皆無ではない。ただし、その他のエスニックグループに属する「台湾人」はいない。



写真⑧ 2010年3月5日に開催された日本富士宮ロータリークラブと台北東海ロータリークラブ共催の「宮坂句美子童謡コンサート」に使用された歌集「心のふるさと 愛の唄」の一頁。筆者撮影。

る他の台湾人コミュニティ、玉蘭荘に関心を持つ台湾の企業、台湾での日系企業、財団法人交流教会の台北事務所、台湾日本人会、日本人学校、その他の日本人コミュニティなど、そして日本からは JOCS、様々な地域のロータリークラブ（写真⑧）、台湾に関心を持つキリスト教関係の団体や国際交流・親善活動団体がよく来訪し、様々な交流会を行っている。運営の中心人物の B さんによると、「とにかく閉鎖的になりがちな高齢者の生活を考えると、高齢者が決断し、一歩踏み出して訪れた玉蘭荘において、より質のよい活動が提供されることが望ましいと考えます。（筆者注：交流活動は）その中の一つのプログラムとして、まったく違った環境の人達との関わりは大いに刺激となり、新たな発見とともに、眠っていたその人自身の感性や感覚が呼び起こされることにもなり、意味深い活動だと考えています。特に小さな児童や学生達との交流は意識的に行っているものです。厳しく限定はしていませんが、玉蘭荘が公用語として日本語を採用していますので、交流は言語を通して行われることから、おのずと主に日本語の通じる団体となっています」という。

また、玉蘭荘は 1993 年以来、訪問ケアなど

の個別ケア活動を続けてきた。毎週水曜日に病気やけがで一般活動日に参加できなくなった人たちやその家族を主な対象として、そして活動参加者ではないが日本語で話したい高齢な人々など玉蘭荘の設立趣旨に基づいてケアの必要な人々に対して、それぞれの希望に応じて、ボランティアたちが電話やお見舞いカードあるいは訪問などでケア並びにサポートを行ったのである。リーダーで保健師の資格を持つ元総幹事 O さんと後の総幹事 I さんによると、1993 年 12 月から 2004 年まで、一

般活動日の参加者も含めたメンバー 7,8 人ぐらいの訪問ケア組が毎週水曜日の午前中に、彼女たちの指導の下に医学や介護などの勉強をしたり、日本の介護関係のビデオを観たり、訪問ケースの報告や相談をしたり、チームで幅広く学んでいた。昼に持参した昼食を一緒にとってから、午後は玉蘭荘の作品などを持参し、2,3 人一組で対象者の自宅、病院、養護施設などを訪れていた。寝込んでいたり体が弱くて寂しい年配者を慰めるように努める。場合によって入浴介助、食事の差し入れなどもするが、多くの場合は日本語で一緒に話したり好きな歌を歌ったり、クリスチャンの場合は一緒に賛美歌を歌ったり聖書を読んだりお祈りもしたりしていたそうである。玉蘭荘に来られなくなった人たちに対しても、継続的にこのような精神的なケアをして、相変わらず玉蘭荘の一員としてのつながりを保たせることを通して心のサポートをする。現在、参加メンバーの高齢化で訪問ケア組の学習会活動は終了したが、訪問ケア活動は続けられている²⁴⁾。

三、玉蘭荘に集まる人々の思いから見た 玉蘭荘の場所性

第二章では主に玉蘭荘の成立経緯を遡って、まず初期の活動と人員構成、そして組織と運営の概要を概観してから、参与観察とインタビュー調査を通して現在の活動の実態を明らかにした。

以下の第三章では、玉蘭荘に集まる人々に注目し、特に参加者たちとボランティアたちの人員構成とその変化を検討する。続いて、彼（女）たちの玉蘭荘に対する様々な思いを取り上げて、彼（女）たちは何故に玉蘭荘に来るのか、彼（女）たちにとっての玉蘭荘はどのような場所なのか、彼（女）たちは玉蘭荘に何を求めようとしているのかなどを整理し分析する。

1. 玉蘭荘に集まる人々の構成とその変化

玉蘭荘が1989年に創設されてからこれまでの人員の入れ替わりは多い。筆者のインタビュー調査によると、活動参加に関して特に年齢制限や日本語力の審査は行っていない。参加者のほとんどは前述したような交流のある教会、その他の日本・日本語と関連ある団体や友人などの紹介で玉蘭荘に通い始めている。中にはクリスチャンでない人²⁵⁾、日本語を忘れたあるいは学んだことのない人、高齢者ではない人なども少なくない。たいていの人は台北市内か台北近郊に住んでいる。創設初期の参加者人数は20人から30人ぐらいで、1990年代中期に入ると50名を超え、2000年に入ると100名近くになったが、平均出席者数は40名から50名前後である。また、初期の平均年齢は60

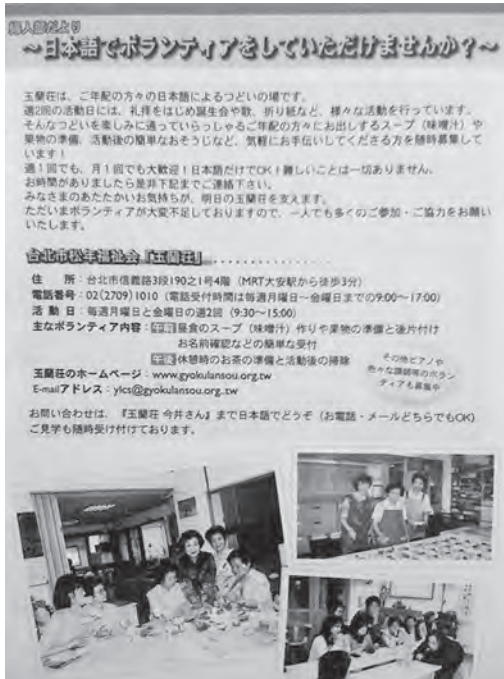
代であるが、現在は80代になっている。そして、初期には男性が5%を占めるにすぎなかったが、現在は約20%に至っている。それから、初期には日本婦人と台湾人の比率は約半々でしたが、台湾人の比率が年々増えて、1990年代中期頃に日本婦人が占める比率は15%～20%となり、現在、日本婦人は5%～10%しか占めていない。それらの日本婦人の中には、日本植民地時代に台湾に生まれて台湾人と結婚した人、戦前か戦後に台湾人と結婚した人、戦後に満洲か中国大陆から避難して日本留学経験のある中国人と結婚した人など、様々な経緯で台湾に居残ったり、あるいは戦後台湾に渡ってきた日本婦人もいる。一方、台湾人参加者のほうは、70代から90代前後の人がほとんどで、日本植民地時代に日本の教育を受けた人が多い。そのほか、戦後に生まれたが、留学やその他の様々な関係で日本や日本語に親しみを覚えたり、日本や日本語に興味を持つ50代から60代前後の参加者もあり、その数は年々増える傾向がある。

また、ボランティアは前述したように、創設初期には安和教会のボランティア、聖書と祈りの会の参加者、艋舺教会の日本語バイブルクラスの婦人たちなどが中心メンバーであった。創設初期からの中心人物のBさんは次のように述べている。「初期のボランティアは、『高齢になられた台湾在住の日本婦人を支える』と言う創立の主旨に賛同した同世代の台湾婦人の方々と、その当時まだお元気だった日本婦人何人かが創立者の堀田久子先生と共に活動を応援し協力していました。当時まだ聞き馴れないボランティアという名前に少々戸惑いながら『助け合いの精神』で、と言うことではないかと思われる。ある時は会員のためにスープや果物を準

ㄨ (24) そのほか、参加者たちの中でも来られなくなった人を訪ねたり電話をしったりするなど自発的な個別ケア活動をしている人がいる。たとえば、元訪問ケア組メンバーで自身も一般活動に参加しているKさんは、自分より年配の90代の日本人参加者Mさんに毎日電

話して様子をたずねて、一緒にさまざまな歌を歌ったりしている。

(25) 厳密的に統計したことがないらしいが、現在玉蘭荘の参加者のなかに、クリスチャンの人は参加者全員の1/3～1/2しか占めていないようである。



写真⑨台湾日本人会台北本部に掲示されている玉蘭荘のボランティア募集文

備し、ある時は会員の席に共に座り、お互いに励まし合う等、会員とボランティアの境界線が余りはっきりとしていないようでした」⁽²⁶⁾。その他の初期からの参加者たちも「最初の頃はお互いに世話し合った」と語っている。なお、参加者の高齢化に伴い、今はホームページや関係団体を通してボランティアを募集している(写真⑨)。現在、一般活動日にボランティアとして活躍しているのは主に20代後半から60代の人で、その中、夫の仕事の関係で台湾在住の人、台湾人と結婚した人、台湾に語学やその他の勉強をしに来ている日本人留学生、日本語世代の台湾人、肉親や親戚が玉蘭荘の元参加者である台湾人や日本人、日本文化や日本語に興味を持つ台湾人など、様々な日本人と台湾人がいる。参加のきっかけも、教会関係で玉蘭荘に来た人、財団法人交流協会か台湾日本人会などの在台北

本人コミュニティを通して玉蘭荘の存在を知って関心を持った人、またはそれらの在台北日本人コミュニティの活動の一環として玉蘭荘を支援するために来ている人⁽²⁷⁾、友人や肉親の紹介で来た人など、多様である。一般活動日のボランティアは当番制で、たいてい一回に5～10人前後が集まってくる。訪問ケアやその他の特別活動の際のボランティアは基本的には自由参加である。なお、普段の活動には参加できないけど、年末のバザーの準備には関わっているというようなボランティアが少なくない。また、会計、出納、牧師、講師、運営委員などのほとんどが無償ボランティアである。

次節では、それらの参加者たちとボランティアたちの玉蘭荘に対する様々な思いに着目し、彼(女)たちは何故に玉蘭荘に来るのか、彼(女)たちにとっての玉蘭荘はどのような場所なのか、彼(女)たちは玉蘭荘に何を求めようとしているのかなどを整理し分析する。

2. 参加者たちの玉蘭荘に対する思い

まずは玉蘭荘の活動に参加している在台北日本人婦人たちの玉蘭荘に対する思いをみてみよう。

以下はまず北海道生まれ育ちで、太平洋戦争の時に満洲に渡って満洲で働き、終戦後に満洲で中国人と結婚し、その後台湾に渡ってきた中国語も堪能な93歳のMさんが書いた一文を取り上げる。

9時30分。ボランティアの100万ドルスマイルの日本商社員夫人馬場さんと、優しい王英英さんの「お早うございます」の元気な声に迎えられます。ああ、もう80歳で半身の不自由な野田さんや、83歳で熱心なクリスチャンの林さんの笑顔が見えます。何時も一番のりです。12階の玉蘭荘

(26) 『玉蘭だより』第75号、2001年3月15日。

(27) 玉蘭荘の参加者たちに日本風のスープを作ること

は台湾日本人会婦人部の活動の一環で、順番で毎回異なる人がスープを作り来ている。

の窓から敦化南路の青い空。緑高くそびえる樟腦の木のグリーンベルトをはさんでバス、タクシー。自家用車。オートバイが信義路を交差して激しい往来です。バイタリティに溢れる台北の1日が始まっています。まさに私も生きているという感じをひしひしと覚えます。感謝です。9時半から10時までは懐かしい日本のメロディーを、各々リクエストしてコーラスです。何時もウォーキングシューズにスラックスの大川さんのうぐいすの声と絶妙なゼスチュアたっぷりのリードで、われらおばあさんは若き日の昔にかえり声を張り上げます。(中略) 大川さんの「神様お早うございます」のやわらかなお祈りの言葉に、クリスチャンでない私も、神様がこの玉蘭荘の一室に下りて来られてわれら老人たちを優しく見守って下さる様な気持ちになります。賛美歌で心も洗われ聖書のお話を日本語の牧師先生、(中略) 人生をよく生きるための影響を深く受けました。また会員の方の「生きたあかし」にも心打たれるものがあります。(中略) 玉蘭荘に初めて入った方は、部屋一杯の会員の書道、国画、手工芸の美しさ、屋内植物の手入れの良さ、トイレまで楽しく芸術化されているのに驚かれるでしょう。淋しい老人でなく、積極的な老人パワーを感じます²⁸⁾。

Mさんは玉蘭荘の創設初期からの熱心な参加者で、この一文は彼女が90年代の中期に書いたものである。彼女にとっての玉蘭荘の魅力は、様々な人の元気な声が聞けて様々な人の笑顔が見えること、家から出て外の世界の動きを肌で感じて自分が生きているのを実感できる喜

び、懐かしい日本のメロディーを聞けて歌えること、祈りや聖書の言葉に心打たれること、玉蘭荘の空間的な雰囲気、などが挙げられる。

玉蘭荘の初代指導者によると、「週一回のデイ・サービスや入浴サービスは変わりばえの無い高齢者の生活・消極的になりがちな彼等にとって、楽しく待ちとおし日。外に出ると云う事だけで、心理的に変化が生ずる。毎日寝間着だけで過ごしたのが着るものを考えたり、身の回りを整えたりしだす。(中略) 又家族以外の人々に声を掛けられたり、思いがけない旧友との出会いや、新しい友人ができたり、他人との接触の中に社会とのつながりが取り戻される。その余韻は幾日も残り、次回の集いへの期待がふくらむ。この繰り返しでデイ・サービス利用者を積極的な方向に変えて行く」²⁹⁾。定期的に外出して家族以外の人と接することは高齢者にとってはとてもいい影響を与えることといえよう。また、玉蘭荘の人々と空間によって作られた雰囲気もほかの多くの参加者たちに好評で、例えば、「四階のドアを開けると、明るく光の射し込む部屋は和やかで暖かい雰囲気が漂い、皆さんの笑顔にすっぽりと包まれ、すぐに魅了されました」³⁰⁾と戦後に台湾人と日本で結婚した後に台湾に渡って来た75歳のUさんが語っている。また、同じく戦後に台湾人と日本で結婚した後に台湾に渡って来た84歳のNさん³¹⁾にとって、「朝ドアを開けて『おはようございます』から『さようなら』まで、まるで日本にいるようで、私にとっては会話がスムーズに出来てとても嬉しい事」だという。また、台湾に来てからすっかり忘れていた幼い頃の童謡などを玉蘭荘で聞いた時に涙が出るほど感動した、と彼女は語っている。そして、戦時中に内地で台湾出身の留学生と結婚して終戦後に台湾に引

(28) 張明德編、前掲書、19～21頁。

(29) 同注10。

(30) 玉蘭荘創立二十周年記念文集編集委員会編、前掲書、

71頁。

(31) 同前、87頁。

き揚げてきた K さんも同じく、「歌いたい」ことが彼女の玉蘭荘に通い続ける理由の一つだという。多くの日本婦人にとって、懐かしい日本の歌を聞けて歌えることが彼女たちの玉蘭荘に通い続ける大きな理由だとうかがえる。それぞれに家庭の事情が異なり、高齢になってから家庭で寂しい思いをしている人もいるが、たとえ家庭的に恵まれていても、玉蘭荘に来て日本語でおしゃべりをして、年を忘れて声を張り上げて娘時代に口ずさんだ懐かしい歌を歌える喜びが必要だという。これらの要素があるから、玉蘭荘が「心の帰る場所」、「第二の故郷」、「憩いの場、癒しの場」だと在台日本婦人たちは口を揃える。

一方、日本語世代の台湾人参加者たちは玉蘭荘にどのような魅力を感じて玉蘭荘に通い続けているのだろうか。それを E さんの一文を通して分析していきたい。

玉蘭荘では、私が小学校で習ったり聴いたりしたことのある懐かしい童謡や歌謡曲が歌えるので、とても楽しく昔を思い浮かべながら歌っております。優しいボランティアさん、それに日本語が堪能な年上の方々が沢山いて、日本語の先生を探すのはとても便利ですので、私の忘れかけた日本語が徐々に蘇って来ました。(中略)「英語」と「外来語」も私の大好きな科目で、何時も欠かさず参加しております。学びの喜びをこの歳になって再び味わうことが出来て、私は本当に幸せです。活動日の朝、ここへ来るとまず「おはよう」と皆さんに声掛けて、席に着いてから、今日は誰々さんは来ているかなと、周囲を見渡して確かめます。皆さんの元気な笑顔を見ると自分も楽しくなり、元気を分かち合えるのです。活動の時

間になると、今井さんのかけ声で、皆で軽く体操をしてから、荘歌と愛唱歌を歌います。それが終わったら朝の礼拝に入ります。讃美歌を賛美し、聖書を朗読し、牧師さんのお説教で聖書の御言葉を享受します。「人生の意義は、神様から与えられた才能を発揮し、活用し、自分のためだけでなく、世のため、人のために尽くし、神の栄光を称えること」と諭された牧師さん、有難うございました。私はこの言葉を目標に生きて行きます³²⁾。

E さんは参加歴 11 年ぐらいの 79 歳の台湾人男性で、日本植民地時代には家庭の中では全部日本語、つまり日本語家庭で生れ育った。「しゃべる相手がいない人にとって、玉蘭荘が重要な場所」だと思い、玉蘭荘に強い責任感を持ち、理事役も勤めている。彼にとっての玉蘭荘の魅力は、参加者たちと元気を分かち合えること、牧師のお説教を通して人生の目標が見えてくること、様々なプログラムで学びの喜びを味わえること、ボランティアたちが優しいこと、懐かしい日本の歌が歌えること、そして日本語がしゃべれることなどである。特に「日本語と日本の歌は楽しい」と、彼は筆者に語った。ある日本語世代の台湾人女性参加者は『玉蘭の花びら』に次の一文を寄せた。「朝の 10 時教室に入るとすぐ聞こえる明るい歌声、大川さんの元気はつつなお姿、そして皆さんの優しい笑顔、この暖かい雰囲気包まれて、私も大きな口を開け一緒に歌う昔の懐かしいメロディー。何もかも忘れて少女時代に返り、心から若返ったような気持ちになりました」³³⁾。E さんに同感しているのをうかがえる。ほかの多くの日本語世代の台湾人参加者も、何よりも日本の歌が歌えることに魅力を感じて玉蘭荘に通っている。たと

(32) 玉蘭荘創立二十周年記念文集編集委員会編、前掲書、59 頁。

(33) 張明德編、前掲書、59 頁。

えば、夫婦揃って10年間以上も通い続けてきた82歳のSさんとFさんは、日本の歌や童謡を歌える、懐かしい日本語と日本文化に触れられる、そして日本風の味噌汁を飲めるなどのことのために、玉蘭荘の活動日を楽しみにしながら毎日を過ごしていると語った。創設初期からの熱心な参加者のTさんとLさんも日本語などで玉蘭荘に魅力を感じて長年玉蘭荘に通っている。Tさんは89歳の女性で、筆者とはじめて会った時に「私も日本にいたのよ」と何回も語ったのが印象深かった。後で話を聞いてみると、彼女が太平洋戦争の時に結婚し、夫と一緒に日本内地へ渡って終戦まで内地で生活したのを分かった。彼女は日本語が忘れそうになった時に日本語を練習したかったため、玉蘭荘に参加し始めたという。一方、Lさんは90歳の女性で、玉蘭荘に来るきっかけは「日本語を忘れないために」と語った。彼女にとって、日本語の歌の時間がなによりの楽しみで、いつも年齢を感じさせない元気で大きな声で歌っている。彼女によると、日本語や日本的な雰囲気に親近感を覚えるから、玉蘭荘に通い続けてきたのである。同じく、1922年に台湾で生まれて、13歳の時に公学校を卒業してから日本内地へ渡って終戦まで内地で生活した経験を持つ88歳の男性のYさんは、「小さい時の生活習慣の関係で、やはり日本の生活習慣が合うんですよ」、「玉蘭荘はとても日本的で、ここに来るとなんだか日本へ行った様な感じで、来た時と帰る時には気分が全然違います」³⁴⁾と述べた。日本語をはじめ、日本的雰囲気に親近感を覚えるため、多くの日本語世代の台湾人が玉蘭荘に通っている。

玉蘭荘には、このような内地経験を持つや日本植民地時代に日本語を常用していた参加者のほかに、日本植民地時代に学校で日本語教育を

受けたことがない参加者や日本語教育を僅か数年間しか受けなかった参加者もいる。彼（女）たちは日本語を勉強したくて玉蘭荘に通っているという。ある人は次のように述べている。「言語を習うには環境が一番大切である。玉蘭荘には元日本籍の老婦人や若い世代の日本婦人、言語留学の学生がおられる、彼女らは日本語しか話せないで、何時も聞いていると耳が慣れて言えなくても大体の意味は納得できる。その中に片言ながら話せるようになった」³⁵⁾。また、「此处の活動は日本語が常用で、会員は皆日本語がとても達者である。それに台湾人と国際結婚した日本老婦人や若い日本人ボランティアと会話するうちにアクセントが自然に良くなる。玉蘭荘に参加したおかげで僕の日本語は随分進歩した」³⁶⁾と述べる参加者もいる。そのほか、前節でも触れたように、この数年、留学その他のさまざまな関係で日本や日本語に親しみを覚えたり興味を持ったりする50代から60代前後の参加者の数が年々増えている。このような参加者にとっても、玉蘭荘の魅力は日本語を公式用語とすることや在台日本婦人と日本人ボランティアが多くいることにある。

3. ボランティアらの玉蘭荘に対する思い

前節では参加者たちの玉蘭荘に対する思いを検討してきたが、一方、ボランティアたちは玉蘭荘をどういうふうに認識しているのか、ボランティア活動に参加するきっかけとは、彼（女）たちは玉蘭荘で何を感じたのか。

すでに説明したように、初期においては参加者とボランティアの境界線はあまりはっきりとしていなかった。日本植民時代を体験したことのある日本語世代の台湾婦人と同世代の在台日本婦人がともに活動をサポートしていた、現在でも、多くの参加者が講師や運営委員などのボ

(34)『玉蘭だより』第76号、2001年5月15日。

(35)玉蘭荘創立十五周年記念文集編集委員会編、前掲書、

98頁。

(36) 同前、121頁。

ランティアとしても玉蘭荘をサポートしている。こうしたボランティアたちは、前節で検討した参加者たちと玉蘭荘に対する思いが共通するところが多い。そのため、本節ではその他の一般活動日に活躍している 20 代後半から 60 代前後の日本人ボランティアたちの語りに焦点を当てて検討したい。

『玉蘭のかほりー玉蘭荘創立十五周年記念文集 一九八九―二〇〇四 日本語版』に多くのボランティアたちの感想が載せられている。その中から二、三を紹介する。

A さん（ボランティア歴 3 ヶ月）日本と台湾の関係の深さを改めて知りました。また会員の方々の明るさと積極的に参加され楽しまれている姿に感動しました。

B さん（ボランティア歴 6 ヶ月）話を伺ったときはとても暗いイメージを持ったのですが、皆さんにお会いしてみたら、皆さんがとても明るく生き生きしておられるのに驚きました。

E さん（ボランティア歴 2 年）老人の集まりと聞いておりましたので介護の必要の方が多いのかと思っておりましたが、皆さんより明るいパワーを頂き、ありがたいと思っています。

F さん（ボランティア歴 5 年）自分が参加することによって玉蘭荘にとっても、自分自身にとってもプラスになればと思っています（お互いが楽しいとか幸せであるとか健康が保たれるとか）。

G さん（ボランティア歴 3 ヶ月）自分の余暇を多少なりともお役に立てば嬉しいです。又、会員の方々、ボランティアメンバーと接することで、私自身も成長し、台湾生活を楽しく有意義なものにしていきたいと

思います。³⁷⁾

「私なりに戦争時の償いとして、又お世話になった人々への恩返しとして、何か台湾の為にできる事はないか」³⁸⁾ というような思いで自主的にボランティア活動をしている人も少なくないだろうが、筆者と話したことのあるボランティアたちのほとんどは、台湾日本人会婦人部の活動をきっかけとして玉蘭荘の活動に関わるようになり、そして引用文の中の A さんのように、玉蘭荘で日本と台湾の関係の深さを改めて知り、参加者たちと接しているうちに彼（女）たちに影響されてボランティア活動をし続けているのである。次に引用するのは創設初期からのボランティアのリーダー格で玉蘭荘の運営の中心人物の B さんが書いた一文である。これを通して、日本植民地時代の台湾を経験したことのない日本人たちが玉蘭荘で受けた衝撃を垣間見ることができる。

一九九一年に主人の仕事の関係で來台した私は、当時理事をしておられた周淑美さんのご紹介で、創立二周年を迎えようとしていた玉蘭荘にボランティアとして伺うことにしました。周さんによると、玉蘭荘は日本人と日本語の出来る台湾の年配者の集まりだとのことでした。五十歳の私は、ボランティアとしてお手伝いするつもりでした。（中略）その後の出来事が、台湾での私の生活のあり方を決定付けることとなりました。一人の台湾ボランティア（この方は会員でしたが、当時はとてもお元気でボランティアとしての働きもされていましたが）が順番が来て立ち上がり、ご自分の名前を話された後叫ぶような声で言われました。「私は今でも日本人です！」声は震え

(37) 同前、57 頁。

(38) 『玉蘭だより』第 56 号、1998 年 10 月 15 日。

ました。「善し悪しでは無いのです、どうしようも無いのです、心が日本人なのです」涙混じりに話された後、小学唱歌「ふるさと」を今までとは打って変わって心静かに美しく優しい声で歌われました。私はこちらに来る前、台湾の歴史はすでに本を読んで知っていたつもりでした。頭では解っていたはずなのに、この衝撃はいったい何故なのか…？頭の中がボーッとしてその方の美しい横顔を唯々眺めていました。私は日本人だと意識したことが今まで何度あったろうか？何の疑問も無く日本人であり続けている自分に、この方の真の気持ちがかかるのか？（中略）彼女が歌った唱歌「ふるさと」は、私にとっても幼い頃姉たちと歌った懐かしい曲で、戦時中疎開した時に家々や山や川がつぶさに浮かぶ歌です。ホットするその風景、体が覚えているあの懐かしさは歴史の流れの中で、この方も日本人として体験された原風景だったのではないかと思いつきました³⁹⁾。

Bさんはそれ以来、そのような世代の台湾人と真摯に向き合い始めたという。高齢の在日台本婦人だけではなく、日本植民地時代を経験した台湾人に対する理解や世話に使命感が生まれ、戦後世代の台湾在住の日本人ボランティアを積極的に組織し、玉蘭荘の運営にも熱心に関わってきた。

なお、すべての日本人ボランティアが彼女のような感情に突き動かされてボランティアをしているのではないし、たとえそうであっても各人によって程度差があるのはいうまでもない。多くの人とはたとえそのような思いがあっても、むしろ引用文の中のEさんように、参加者た

ちの生き生きしている姿からパワーをもらっているからこそボランティア活動が続けているという。また、引用文の中のFさんのように、ボランティアとして参加者たちに必要とされている喜びを感じると同時に、自分も様々な意味で玉蘭荘を必要としているのだと語るボランティアが多い。たとえば、あるボランティアは「玉蘭荘はお年寄りだけではなく、私にとってもオアシスと言えるかもしれません」⁴⁰⁾と述べている。また、台湾人と結婚したあるボランティアは「ボランティアの先輩からは、美味しい台湾の料理の作り方や買い物の場所、台湾の文化、言語の発音も教わっている次第です。私の大先輩に当たる（台湾人と結婚された日本人）女性の話を聞かせて頂くとどんなに大変な事があっても、些細なことになってしまいます。私にとって玉蘭荘は様々な事を学べる場所であり、台湾に住むにあたり必要不可欠な場所になりそうです。」⁴¹⁾と語った。自分と似た経験を持つ先輩たちと接することができるので、玉蘭荘を通して台湾をより一層理解できるし、台湾での生活をより一層スムーズなものにするために不可欠な場所だと認識している人も少なくない。

そして、あるボランティアは次のように述べている。

言葉も通じない、仕事もなく友達もいない台湾での生活はまさに未知の世界。毎朝主人を見送ってから夜遅く主人が帰るまで話す相手もなく、何をしてもいいかも分からず時には自分が何のためにここにいるのかと疑問に感じることもありました。そんな時主人の会社の方から玉蘭荘の話を聞き、ぜひボランティアとして参加させて欲しいと玉蘭荘のドアを叩きました。当初の私に

(39) 玉蘭荘創立十五周年記念文集編集委員会編、前掲書、71～72頁。

(40) 『玉蘭荘だより』第48号、1996年12月25日。

(41) 玉蘭荘創立二十周年記念文集編集委員会編、前掲書、2009年、50頁。

とって日本語で話が出来るといえる相手がいるというだけでどれほどほっとしたことか。しかもそこに集まっていたのは台湾にしながら日本の文化を愛し、日本語を話すことを喜びとし、日本の童謡や唱歌、演歌を歌うことを愛する方達でした。それは台湾に来たばかりでありながら日本を恋しくて思う私にとっても非常に心癒される空間でした。玉蘭荘は台湾で暮らす高齢者の会員の方達にとって大切な場所であるだけでなく、ボランティアの私達にとっても大変重要な場所なのです。私は初めて玉蘭荘に来た時に、「台湾にも私の居場所があった」とそう感じたのです。異国での生活がまだまだ浅い自分ですらこれほど玉蘭荘の存在に支えられたのだから、数十年もの長きにわたり日本語でのコミュニケーションを抑制されてきた方々にとってここ玉蘭荘がどれほど救いになっただろう、とその想いは私には計り知れません⁴²⁾。

前述した高齢の在日日本婦人と同じく、玉蘭荘は近年台湾に渡ってきた彼女たちにとっても「癒しの場所」だということがこの一文からうかがえる。日本を恋しく思う時に玉蘭荘が必要だと語るボランティアたちが多い。このことは玉蘭荘がなによりも「日本的な」場所で、まさしく「台湾の中の日本」であることを逆照射しているといえよう。

四、結びにかえて

前章では、玉蘭荘の一般活動日に参加している参加者たちとボランティアたちを中心に、彼(女)たちの玉蘭荘に対する思いを分析した。以下では、玉蘭荘を支援したり交流関係のある

外部団体の玉蘭荘に対する眼差しを加え、そして運営側の玉蘭荘に対する定義や期待も視野に入れて、そうした人々の思いを分析し、それらの思いが玉蘭荘のあり方にどのような影響を与えているのかを考え、玉蘭荘の場所的特質を検討していきたい。

1. 外部の支援や交流団体の玉蘭荘に対する眼差し

「かつて日本教育を受けてこられた台湾の方々のための『日本語によるケアセンター』として設立されたとお聞きし、あらためて台湾と日本の長い歴史的な繋がりを感じました」⁴³⁾と語った人がいる。日本語使用ということから、玉蘭荘を日本と台湾の歴史を改めて考えさせられる貴重な場所だと考え、だからこそ国際親善交流の場として貴重だとみなしている団体が多い。あらかじめ日本語を話せる台湾人が多いことを知っていたとしても、実際に日本から来訪し、「玉蘭荘に着いてまず始めに驚いたのは、皆さんが完全な日本語を話されていたことです。日本語教育を受けたため日本語を話される方が多いということは聞いていましたが、私たちとは違う言語を話されるのではないか、という思いがありました」⁴⁴⁾といったように、玉蘭荘の日本語世代の台湾人参加者たちと会った時に衝撃を受けた人も少なくない。

2004年から毎年玉蘭荘を訪問する日本長野県のロータリークラブが提唱し育成しているインターアクトクラブの高校生研修団は、玉蘭荘を「外国に在って日本を観る、識る、学ぶ」のための台湾での最高学舎と評価し、「日本にはもう残されていない美しい日本語で、居住まいも正しく語られる姿に感動し、『故郷』歌唱の折の眼差しを拝見した時に熱いものが溢れました。台湾に居られる皆様から日本を、日本人を

(42) 同前、51頁。

(43) 『玉蘭荘だより』第126号、2010年4月15日。

(44) 同前。

教えられた」と述べている⁴⁵⁾。日本語世代の台湾人たちの日本語の使用などの実態を目にすることによって、彼（女）たちを「日本人」として、そして玉蘭荘を台湾での「日本」とみるような眼差しがうかがえる。台湾国際日語教会の日本人長老が玉蘭荘との交流会を終えた後に『玉蘭荘だより』に寄せた一文からも、そうした眼差しがうかがえる。

懐かしい日本の童謡、唱歌からの歌合戦は、時を忘れて全員が熱中しました。日本からきた私達と、台湾の皆さんが数年前に、歌った童謡、唱歌を歌いながら、日本と台湾の過去を思い出さずにはいられませんでした。（中略）最近、台湾を訪れた日本人が決まって言う言葉は、「懐かしい古き良き時代の日本が台湾に残っている」と。彼らはこれが誠に嬉しく、台湾の親日感情を肌で感じて、感激するのです。（中略）今の日本を顧みるときに、太平洋戦争に負けたとはいえ、戦後日本文化、伝統が次々に廃れていきます。（中略）しかし台湾には、まだまだ元気な元日本人がたくさん残っていて、貴重な日本文化を保存して下さる。これは、将来の日本にとっても貴重です。なぜなら、終戦と共に、日本人は生きる力を失い、アメリカ文化の流入で、大部分の日本精神が奪われてしまったからです。不思議なことに、終戦時、台湾は戦勝国になりました、中華民国の弾圧があったとはいえ、日本精神は壊されずに残りました。日本精神を書物にされた多くの台湾人著者がおられるのがその証拠です。玉蘭荘の皆様は、以上申し上げた事々の生き証人

だと私は思っております。⁴⁶⁾

このように玉蘭荘の日本語世代の台湾人たちを、「懐かしい古き良き時代の日本が台湾に残っている」ことのいわば生き証人だと思う人がほかに多いと思われる。その点に意味を見出し、「お年寄りの皆さんの話されていた日本語と友好的な姿に感銘を受け」⁴⁷⁾ たために、玉蘭荘との交流会を開催したり、玉蘭荘を支援し続けている在台日系企業や日台国際親善団体が多数。それらの交流団体や支援団体・企業にとって、玉蘭荘は「台湾の中の日本」のように思われ、玉蘭荘の日本語世代の台湾人たちは美しい日本語と日本精神を現在でも残している「元日本人」で「親日的な台湾人」というわけである。

2. 運営側の玉蘭荘に対する定義と期待

いざや わが友 もろともに／歌をうたえば 疲れし心若返り／喜び満ちて 笑みあふる／豊かな人生 神の恵みに守られつ／此処に愛あり 幸もあり／いざや わが友 もろともに／悩み語れば 憂いも消えて和やかに／集い楽しく 笑みあふる／豊かな人生 神の恵みに守られつ／此処に愛あり 幸もあり／いざや わが友 もろともに／齢老ゆるとも 心満ち足り健やかに／助け合いつつ 生きゆかん／豊かな人生 神の恵みに守られつ／此処に愛あり 幸もあり⁴⁸⁾

第二章で述べたように、玉蘭荘は日本語で在台日本婦人と日本語世代の台湾人をケアするという趣旨に基づいて、日本人宣教師の呼びかけによって創設されたのである。そのため、初期

(45) 玉蘭荘創立二十周年記念文集編集委員会編、前掲書、11頁。

(46) 『玉蘭荘だより』第128号、2010年10月15日。

(47) 同注43。

(48) 「玉蘭荘の歌」。この荘歌は参加者たちから募集したものから、運営委員たちが選んだものである。（『玉蘭荘だより』第33号、1995年6月25日。）

から現在に至るまで、毎朝のプログラムには必ず「礼拝」の時間が組まれている。そして当然のごとく、運営中心人物の中には教会関係の人が多く、現在でも玉蘭荘の精神と使命を「日本語を愛用し、日本語で神を賛美し、キリストの教えと福音を述べ伝える」⁴⁹⁾と考へ、玉蘭荘は「憩いの場所であり、信仰を培い、晩年を有意義に過ごす大事な所」⁵⁰⁾と思う人が多い。また、本節の冒頭に挙げた玉蘭荘の荘歌の内容からもうかがえるように、玉蘭荘が期しているのは、参加者らが「今までの人生の栄枯盛衰を各々忘れ、皆と共に歌い、語り合い、助け合う、豊かな人生を築こう」⁵¹⁾ということである。さらに、玉蘭荘は「癒しの場、憩いの場となり、心の拠り所となって、喜びも悲しみも共に分かち合い、助け合い、お互いの失敗や欠点を受け入れ、赦すことと赦されることを学びながら、徐々に成長してゆく生命共同体となれるように共に努力し、老に至る、永遠の生命に入る心の準備を整える場となる」⁵²⁾ことを多くの人々が期しているのである。

そして、前記の交流団体や支援団体の「懐かしい古き良き時代の日本が台湾に残っている」というようなまなざしに応えるように、ある90代の理事は「日本の美しい文化、若き日に学んだ日本のよき教育、日本人として育てられて覚えた日本のよき生活習慣を、台湾人及び若い人たちにお伝えすることができたらと願うばかりです」⁵³⁾と述べ、「交流協会や日本人会等との交流を重視し、より深め、より良き台日文化交流の架け橋になることが最も大事だ」⁵⁴⁾と、今後の玉蘭荘に期しているが、同じような考え方を持っている人が少なくない。

3. 玉蘭荘の場所的特質をめぐって

成立経緯や前節に検討した運営側の思いから見ると、「キリスト教的」というのは、玉蘭荘の場所的特質の一つだと思われるだろう。確かに、日本語と中国語が併用される玉蘭荘のパンフレットには、宗旨を「キリストの博愛精神によって、憩いと活動の場を提供し、高齢者が活動と奉仕を通して、愛と喜びのうちに相互にいたわりあい、最後まで社会の一員として尊厳のあるより充実した生活ができるようサポートしていきます」と、記している。また、いくつかの教会からボランティアが来ていること、運営の中心人物の中にキリストの教えと福音を述べ伝えることを玉蘭荘の精神と使命と思う人がいること、一般活動日には毎回「礼拝」が必ずプログラムに組まれていることなどをもって、キリスト教と密接につながり方ももっともなところがある。しかし筆者は、参与観察とインタビュー調査を通して、設立の目的と運営の目標は宣教というよりもむしろ、日本語による精神的なケアにあることを明らかにしてきた。

玉蘭荘での「礼拝」は宣教のためか、あるいはケアのためなのかについて、総幹事のIさんに尋ねてみたところ、そのようなことは調べたことがなく、毎回異なる各牧師の個々の意思を尊敬していると答えてくれた。また、運営の中心人物のBさんによると、多くの牧師は参加者たちとほぼ同時代を過ごしたため、日本語に関しても問題はなく、様々なことに対しても参加者たちと共感できるので、彼（女）たちの説教を聞いて、クリスチャンの参加者は教会で聞く説教よりも話が分かりやすく、親しみを感じる場合が多いという。一方、非クリスチャンの参加者たちに「礼拝」について聞くと、宣教の

(49) 玉蘭荘創立二十周年記念文集編集委員会編、前掲書、60頁。

(50) 張明德編『玉蘭荘のシルバー族』台北市松年福祉会玉蘭荘、2009年、4頁。

(51) 同注48。

(52) 玉蘭荘創立十五周年記念文集編集委員会編、前掲書、74頁。

(53) 玉蘭荘創立二十周年記念文集編集委員会編、前掲書、9頁。

(54) 同注49。

ような感じはしないという。第三章で紹介した参加者たちの思いからも分かることなのが、クリスチャンであれ非クリスチャン⁵⁵⁾であれ、参加者のほとんどは神の恵みに守られているような玉蘭荘の雰囲気癒しや憩いを感じている。そして牧師たちの説教に、人の守る道を教えられ⁵⁶⁾、人生の意義を考え直させられたという。また、牧師の祈りを聞くことと、賛美歌を歌うこと、そして聖書を読むことを日本語の勉強だと思っている⁵⁷⁾人も少なくない。

次いでは日本的ということについて改めて触れえおきたい。これまで検討してきたように、「日本的」ということが、玉蘭荘に集まる人々も外部の支援団体や交流団体も共感できる一番大きな場所的特質だといえよう。元総幹事のOさんによると、「この日本的な雰囲気はどこに行っても味わえない」というのをよく耳にしたという。また、「日本語を通じて繋がっている感じです。もし、そういう雰囲気がなければ、ここはただのケアセンター」⁵⁸⁾と語る人が多い。玉蘭荘では、日本語を話すことができる、日本の歌や童謡を歌うことができる、懐かしい日本語と日本文化に触れることもできる、そして日本風のおいしい味噌汁を飲むこともできる。そのため、参加者たちにとって、玉蘭荘はまさに「台湾の中の日本」です。Yさんが語ったように、ここに来たらなんだか日本へ行ったような感じである。ほとんどの参加者はそうした雰囲気を味わうために、玉蘭荘に通い続けていると思わ

れる。

ただし、そうした「台湾の中の日本」は、決してもともと存在していた場所、言い換えれば、思われているような終戦後も壊されずに残されてきた場所ではないと思う。元総幹事のOさんによると、玉蘭荘の日本的な雰囲気は「とても自然な環境でした。全く意識的なものはありませんでした」。そして、運営の中心人物のBさんも、「特に強い意識を持って（筆者注：日本的な雰囲気を）作り上げてきたわけではなりません、会員の方々が過去を懐かしんだり、日本的な行事を好まれたりするので、希望にこたえ、日本人のボランティアらが日本的なものをいろいろと手作りしたり、日本からの訪問客がお土産に持ってこられた品々が自然に集まり、自然と雰囲気を醸し出しているのかも知れません」と述べている。Bさんの言葉から理解できるのは、玉蘭荘の「日本的な雰囲気」といった場所的特質は、在台日本婦人と日本人ボランティアがいるから自然に「日本的」になったのではなく、在台日本婦人たちと同時代を経験した日本語世代の台湾人たちの「日本」を求める思い、彼（女）たちの望みを応えようとする運営側の人たちとボランティアたちと支援や交流団体者たちの思い、そしてそれらの人たちの自分自身の「日本」に対する様々な思いが込められている。すなわち、在台日本婦人と日本語世代の台湾人があるから自然に「日本的な雰囲気」が醸し出されているわけではなく、そこに集ま

(55) 総幹事のIさんによると、クリスチャンの参加者たちは日曜日にそれぞれの所属教会に行っている。ほとんどの教会は台湾語又は中国語を使っているため、日本婦人たちと日本語世代の台湾人たちにとって、玉蘭荘では日本語で聖書を読み、学ぶことが出来るので、聖書理解の一助になると多くのクリスチャンの参加者たちが思っているようである。また、クリスチャンの参加者は1/3～1/2しか占めていないために聖書をさらに深く教えて御言葉を味わってもらうことは「礼拝」の時間に全員に押しつけられないので、2008年10月から、玉蘭荘は月に1回（第一水曜日に10時～11時30分）台湾基督長老教会の国際

日本語教会の日本人牧師に依頼し、更に深く聖書を学びたい人や日常生活での悩み疑問など相談したい人のために、礼拝のように一方的に聞くのではなく、参加者がもっと自由に話せる場所として、小グループで聖書を学んで御言葉を味わう場を設けている。「聖書に親しむ会」と称す。（『玉蘭荘だより』第127号、2010年7月15日。）

(56) 張明德編、前掲書、1995年、49頁。

(57) 玉蘭荘創立十五周年記念文集編集委員会編、前掲書、98頁。

(58) 玉蘭荘創立二十周年記念文集編集委員会編、前掲書、47頁。

るすべての人々が共同で「台湾の中の日本」を築いてきたのだといえよう。

4. 今後の課題

本論文の冒頭の一文でも書かれているように、玉蘭荘は妙に日本の懐かしい空気が漂っている場所で、様々な歴史の重みを抱えた人々がそこに集まっている。この「台湾の中の日本」に対する理解を深めることを通して、日台が交錯する歴史と「日本人」の戦後の一端が見えてくるだろうと筆者は思う。

なぜ「台湾では赤とんぼがいなくても共に『赤とんぼ』を歌っては郷愁に侵ったり、雪が降らなくても『津軽海峡冬景色』の曲に心をふるわせたりする」のか。参加者たちはなぜ台湾でこのような「日本的な場所」を求めようとしているのか。日本語の話せる場所はなぜ日本婦人たちにとってとても重要であるのか。すっかり忘れていた幼い頃の童謡などを聞いた時になぜ涙が出るほど感動したのか、日本語世代の台湾人たちはなぜ玉蘭荘のような場所を必要とするのか。なぜ玉蘭荘に親近感を覚えるのか、なぜ日本語を忘れないようにするということにこだわるのか。玉蘭荘で日本語を話せる喜びの背後にどのような感情が含まれているのか。なぜ日本婦人たちと同じくこの「日本的な場所」に癒しと憩いを感じているのか。これらの問題を明らかにするために、日本語世代の台湾人の日本植民地時代における日本語教育の経験と終戦後における言語抑制の経験、そして、在日日本婦人が経験した「終戦後の旧植民地」、言い換えれば、「元植民者」という名を背負いながら生きた「終戦後の旧植民地」について検討しなければならない。紙幅の制限もあって解明を果たせなかったこれらの課題を、次の機会にぜひとも明らかにしたい。

【謝辞】

この場を借りて、研究調査を受け入れ、インタビューに応じてくださった玉蘭荘の皆様方と元総幹事の皆様に深くお礼を申し上げます。本論文が彼（女）たちにとって意義あるものであることを心から願っています。また、本論文の執筆にあたり、大阪経済法科大学アジア研究所の月例会に参加した皆様方をはじめ、大阪大学文学研究科日本学研究室の川村院ゼミと杉原院ゼミの皆様方、日本順益台湾原住民研究会の皆様方から、多大なご助言・ご示唆を頂いた。記して謝意を表したい。

なお、本研究は大阪経済法科大学アジア研究所「若手サポートプログラム」、大阪大学グローバル COE プログラムコンフリクトの人文国際研究教育拠点 21 年度（第三次）と 22 年度（第一次）「大学院生研究調査助成」、大阪大学文学研究科 22 年度「多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム」制度による助成を受けたものである。

引用文献

- 宮本孝『玉蘭荘の金曜日ー台湾に生きる日本人妻たちの戦後 50 年』展転社、1997 年
- 張明德編『玉蘭の花びら』社団法人台北市松年福祉会（玉蘭荘）、1995 年
- 玉蘭荘創立十五周年記念文集編集委員会編『玉蘭のかほりー玉蘭荘創立十五周年記念文集一九八九ー二〇〇四 日本語版』社団法人台北市松年福祉会⁵⁹⁾、2004 年
- 玉蘭荘創立二十周年記念文集編集委員会編『玉蘭のかほりー玉蘭荘創立二十周年記念文集 日本語版』社団法人台北市松年福祉会「玉蘭荘」、2009 年
- 張明德編『玉蘭荘のシルバー族』台北市松年福祉会玉蘭荘、2009 年

(59) 玉蘭荘が刊行した本の発行所の欄に、名称は統一されていない。以下は各出典に記している名称のまま

にする。

『聖書と祈りの会だより ^{ギョッラン} 玉蘭』、1988年4月7

日～現在

『玉蘭だより』、1992年8月10日～現在